

平成 23 年 7 月 10 日

## ウナギ産卵場研究 急展開！ 一蒲焼きの危機に福音一

東京大学・九州大学・熊本大学・北海道大学・国立台湾大学・フランス国立環境工学研究所  
(Cemagref)・オランダ ライデン大学・日本さかなの会・日本鰻協会

(発表内容)

2011 年 6 月 24 日から 7 月 10 日に実施されたウナギ産卵場調査航海(KH-11-6：主席研究員：塚本勝巳、次席研究員：望岡典隆)において学術研究船白鳳丸(船長：鈴木祥市)は、天然のニホンウナギ卵約百五十個を採集することに成功した(図 1)。



図 1 白鳳丸により採集された発育段階の異なるウナギ卵。採集によるダメージを受けたものも多い。

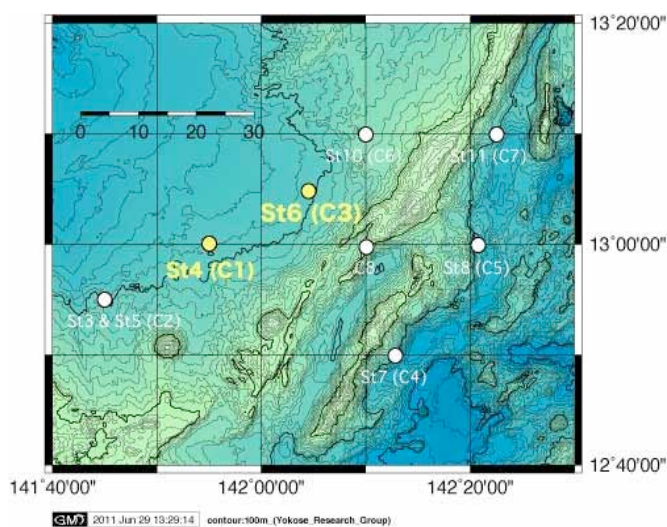


図 2 ウナギ卵採集場所(St.4, St.6)。塩分フロントは北緯 13 度付近に認められた。

採集地点は 2009 年の研究成果に基づいて予想された、西マリアナ海嶺と塩分フロントが交差する海山域であった(図 2)。また、採集された卵の発達段階とそれぞれの採集日時から逆算すると、ウナギは新月の 2-4 日前にほぼ同一海域で毎晩、産卵しているものと推測された。卵の分布水深から、ウナギの産卵は水深 150 - 200m の比較的表層近くで行われることもわかった。今回の卵発見で、産卵の地点と時を精密に特定できるようになった。いずれ近い将来、人類はウナギの産卵シーンを目の当たりにすることができるようになるだろう。

こうしたウナギの産卵生態研究は、激減するウナギ資源の保全と人工種苗生産技術の確立に大きく寄与する。

ウナギ卵の採集は、2009年の31粒に続くものである。しかしながら、これらは遺伝子による種判別のため、採集直後に船上ですべてすりつぶされ、実際の標本は現存していない。百個以上の卵が採集された今航海には、国内外の研究者・技術者（4カ国7機関計24名）に加え、鰻関連業界およびNPO関係者の参加を得た。そこで、採集したウナギ卵の多くは多少なりともダメージを受けたものであったが、計7粒のホルマリン固定標本を作成した。これらは世界で初めて、広く一般市民に天然ウナギ卵を観察する機会を提供するものである。なお、ここで得られた標本は、7月16日から10月16日まで、東京大学総合研究博物館の特別展示「鰻博覧会」にて公開される。

（問い合わせ先）

東京大学大気海洋研究所

広報室 特任専門職員：佐伯かおる

〒277-8564 柏市柏の葉 5-1-5 5階 566

TEL/FAX 04-7136-6430

kouhou@aori.u-tokyo.ac.jp



海洋研究開発機構（JAMSTEC）学術研究船白鳳丸（全長100m：総トン数3991トン）



プランクトンネット（ORI-Big Fish：直径3m、目合0.5mm）による採集風景